

追悼文

青蓮院門跡

門主

東伏見慈晃

平成二十六年一月一日、父、前総裁は百三歳の天寿を全うし、安らかに安養の浄刹に旅立ちました。

平成十八年四月に起立性低血圧症を発症して、立ち上がると貧血を起こす治療のない病で、寝たきりの生活を余儀なくされました。

庭の草ひきや、歩くことの好きだった父にとり、身体の機能を次第に失っていくこととなり、本当に気の毒なこととなりました。

それより前、平成七年に喉頭癌の手術で声帯を失ってからは、ブザー状の器械で会話をしてきましたが、七年ほど前からは、器械の操作が難しくなり、次には筆談となり、それも数年前から意思疎通の困難さが進行していきました。もつと話を通じるときに、武徳会様のことを色々聞いておくべきだったと悔やまれてなりません。

最後は、何もしてあげられないもどかしさと、悲しさでした。見舞いに行っても、今日は武徳祭がありましたよとか、分かっているかどうかは別に、ただ一方的に話しかけるだけで、本当に痛ましいことでした。

父が武徳会の大会に出席できなくなりました事情はそのようなことですが、私が青蓮院に入りましてから、まもなくのことです。

従って父が武徳会の先生方や行事に、また、会の運営等にどこまでご縁が深かったのか、私はほとんど知らないといつて良いほどです。

父は戦前の大日本武徳会の最後の総裁を自分の父、久邇宮邦彦王が

務めており、武道家でもない僧侶の身で会長をお受けしたのは、その理由からだと思えます。父は父邦彦王のことを「おもうさま」と呼び、折にふれ話に出る時は、邦彦王のことを大変大切に思っていたことが思い出されます。

従って会の運営上のこともご相談に預かる気持ちがあり、「〇〇先生がこう云っていた」等々具体的な問題について、その都度、母に話していたように記憶しています。父としては会の運営に相当関心があつたようです。

今般、戦前の大日本武徳会の京都支部道場を「青龍殿」として移築再建活用することになりましたが、このことはもちろん父に話しかけ、どこまで理解できていたか分かりませんが、逐一報告して参りました。もし父がしっかり判断、認識が可能であつたなら、「青龍殿落慶」をどんなに喜んでくれたかと思えます。そのようなことから、今秋十月四日の落慶式まで、もう少し永く存命してくれたら、現場をお見せできたなら、どんなに良かったかと思えます。

この事業は父の武徳会様への思いを私なりに、果たすことが出来たと考えております。

父への追悼文をとお話でしたが、意に沿わない文となりましたこと、お許しください。

末筆ながら大日本武徳会の益々の御隆盛と、諸先生方のご健勝をご祈念申し上げます。